

小学校検定教科書の構文調査

—外国人児童の教科学習支援のための基礎研究—

中尾桂子

読解指導 検定教科書 構文調査 パターンマッチ 形態素解析

1. はじめに

義務教育課程に編入してきた外国人児童の日本語指導をめぐっては、現在さまざまな問題点があげられるが、特に教科教育につなげるための日本語指導内容について関心が高い。先行研究では、日本語指導が教科学習の理解補助を第1の目的とすることから、効率よく教科学習のスキルを身につけるため、検定教科書内の語彙に着目した日本語指導の方法が模索されている（東京外国語大学, 1998；三島, 1996；岩沢・高石, 1994；寺田, 1994）。日本語学習に教科学習で使用される語を盛り込むことは、学習する際の概念理解を助けるため、限られた時間内での効率化をはかるのに有効である。

しかし、様々な日本語運用能力が必要となる学習活動のためには、バランスよく4技能を身につけておく必要がある。効率を考慮して検定教科書と関連づけた日本語指導をする場合、先行研究に見られるように、概念理解の補助となる学習用語を盛り込んだ語彙教育や漢字への対応以外に、さらに、書き言葉の指導として作文教育や読解教育を考慮しなければならない。ところが、これらの指導はあまり行われていない（東京外国語大学, 1998）。中でも、読解能力は、作文能力や認知能力とも関係があり、重要であるにもかかわらず、特に指導が不十分である。そのため、語彙教育だけでは、検定教科書から知識を得る能力が十分に養われているとは言えない。

効率よく読解スキルを養うためには、話し言葉として学ぶことが多い実用文型と書き言葉とを関連づける指導が必要になるだろう。その指導を行うためには、教科毎の構文の特徴的な使用傾向や、教科書の文と構文モデルとの対応を把握し、それをもとに、検定教科書の文章のディスコースを検討した結果、読解指導のための指導内容を選定し、読解教材のよりよい利用法を考えておかなければならない。

しかし、現在のところ語彙調査以外で検定教科書の調査が行われた例は少ない。特に、「初級」構文と検定教科書の文との関連や、それらの教科毎や学年毎の調査は、中級への移行期の指導を考える資料としてまず明らかにされるべきものと考えられるが、資料として提示された例はない。そのため、検定教科書に

はどのような構造を持つ文が使用されているのか、また、それらが初級日本語として指導される構文とどの程度関連しているかということをはっきりさせる必要がある。

そこで、本稿は、書き言葉の指導を考える第1歩として、まず、検定教科書の構文調査を行うことにした。従来の調査は手作業によって行われることが多かったが、手作業では労力が大きく時間がかかり、一定の規則を統一的に適用するには一貫性に欠ける恐れがある。そのため、教科書の文をコンピュータに入力してテキストデータ化し、これをリスト化した実用文型と照合する方法によって構文の分類調査を試みる。

構文の分類を行うには、従来の構文解析の方法を取らないで実用文型を用いてパターンを照合する。その理由は、1) いわゆる「～は～だ。」のような実用文型のパターンは実文から文の骨格部分として抜き出したものであるが、これを利用すれば、形態からだけでも機械処理による分類が可能であるということ、2) 現場の教師など、誰にでもすぐ活用できるよう、一般的で汎用性の高い分類形態を取ることが望ましいためである。

照合には、実用文型パターンの文末部分の形態のみからでも構文全体が判断できることを利用し、実用文型の文末部分の形態だけを用いた文末表現リストと、複文の構造についても把握するための、初級、初級外に分けた接続表現形態リストを用いた。これらのリストを教科書の文と照合することで、単文、複文、初級構文、初級外構文を同時に分類する。

今回の調査で使用する初級文末表現と初級接続表現のリストは、国際交流基金の『日本語能力試験出題基準』（国際交流基金,1996）3、4級から抽出した文末表現と文法事項をもとに作成した。また、日本語には、分かち書きの習慣がなく、同音異義語が多いため、リストと照合するだけでは正確な調査結果が得られない。このため、文と文型リストを形態素に分解し、形態素毎に照合を行うことによって、機能語と実質語を区別し、同音異義語による誤りを防ぐ。

しかし、教科書の文を全て形態素分解するには、手作業では、労力が大きく、一貫性にかける恐れがある。このため、効率の良さを考え、作業の自動化と高速かつ一貫した処理が可能であることが期待できる形態素解析システムを利用した。形態素解析システムを利用して、実文を分割し、品詞情報を添付することで、前後の関係からも、いわゆる表現文型の形態が判断でき、より正確な文型パターンの照合が行えるようになる¹⁾。

今回は、以上のようにして、含有構文の傾向と、初級で学習する構文と検定教科書の実文との関連性を調査する。これは、児童・生徒の書き言葉指導の一環として、検定教科書と関連させた読解指導内容を考える基礎研究となる。

2. 検定教科書の構文調査

多くの場合、述部は文末に位置する。文末の述部は構文の核となる。そのため、文末の表現で実用文型が類推可能となる。このことから、構文調査は文末の表現に着目して行うことにする。また、日本語の構文の特徴に、文を複合化する場合の接続表現の多様さが挙げられる。接続表現は、学習者の誤用が多く、日本語の上達に欠かせないものである（市川,1993）。このような複合化された場合の構文上の特徴は、文末表現からだけでは判断できない。そこで、文末表現と平行して文と文を接続する際の指標となる接続表現についても調査する。これら文末表現と接続表現から検定教科書で使用される文構造の概要を明らかにする。

また、接続表現を含むか否かによって、文の構造は複文と単文に分類することができる。複文は述部が2つ以上で構成されている文、単文は述部が1つからなる文である（益岡・田窪,1992）。したがって、単文は接続表現を含まない。このため、接続表現の有無によって複文か単文かが判定できる。ただし、今回は動詞性の形態素に後接する接続表現についてのみ複文の調査対象とする。また、動詞述語文が名詞を修飾する連体修飾節は指標となる接続表現を持たないため、連接する品詞の並び方で判定することにする。

単文と複文、初級の知識で認識できる範囲、そして、複文を構成する接続表現の1文中の出現状況について調査し、検定教科書でどのように構文が使用されているか概要を明らかにする。

2.1. 文末表現と接続表現の選定

初級で学習する構文の知識で検定教科書の実文にどの程度対応できるかを調べるにあたっては、初級の文末表現を選定する必要がある。『日本語能力試験出題基準』3、4級と使用頻度の高い児童の日本語教材2種類²⁾を比較検討した結果、

両者の差違がほとんどないことがわかった。そこで、『日本語能力試験出題基準』で初級と考えられる3級と4級に挙げられている文法項目の中から、文末で述部を構成するものを文末表現と、文を複合化するものを接続表現として抜粋し、整理した。これらをもとに、文末表現と接続表現のリストを作成した。リストは図1に示すように、機械処理のために、正規表現の形態で書き改めてあ

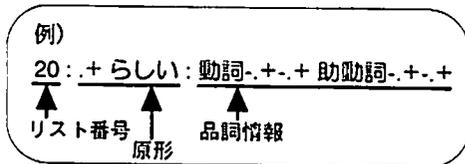


図1: 文末表現リストの例

る。正規表現とは、形式のパターンを取り扱う方法である（長尾,1998）。

文末表現は86種類あったが、接続関係を考慮して下位分類した結果、172種類となった。この172種類以外の文末表現は初級では学習しない文末表現だということになる。172種類の文末表現は、正確な機械処理のために優先順位を決め、基本的には形態素の少ないものから順に、1から172の番号を付けた。さらに、初級文末表現は数が多いため、傾向を大きく捉えるには困難である。そこで、この172種類の文末表現を構造や意味機能により8種の文末表現グループ（以下、文末表現1-8）にさらに分類して整理を行うことにした。

文末表現1はいわゆる動詞述語文、名詞述語文、形容詞述語文などの基本的な構造文型である。

文末表現2は動詞述語文の中でも、形態的に動詞1語で述部を構成していない動詞述語文のグループである。いわゆる補助動詞の述語文である。複合動詞は補助動詞とはちがうものであるが、『日本語能力試験出題基準』の3、4級に出ているものが2、3種類しかいないため、形態的に動詞1語で述部を構成していないという点が共通するとして、グループ2に分類した。このような文末表現が動詞述語文である文は多く使用されていると予想される。したがって、使用実態について詳しく教科、学年における傾向を調べるために、最も基本的な構造文型とは別のグループにした。

文末表現3は助動詞文である。いわゆる助動詞ではなく、形態素解析器『茶筌』（松本他,1997）でいう助動詞で、「ようだ」「そうだ」「らしい」「つもりだ」等の文を指す。

文末表現4は引用助詞を使用する文で、「思う」「言う」が引用助詞「と」や引用の「ように」等と共に起する場合の文である。

文末表現5は「なる」「する」の表現である。

文末表現6は“やりもらい”の授受表現である。日本語教育ではこの表現の習得が困難になることが多いため、特に取り立てて傾向を調べようと考えた。「さしあげる」などは敬語になるが、構文上は授受表現のグループに入るので敬語としては分類しなかった。

文末表現7は尊敬語や謙譲語のグループである。これも日本語教育では習得が困難であるにも関わらず、その習得要求度が高い。そこで、学年別の傾向を調べるため、別グループに分けた。

文末表現8は、「～てください」や「～てもいいです」等、話し手の意図が表現される1～7以外の表現文型である。種類は多いが使用頻度は高くないということから、一つにまとめた。

接続表現は、文末表現と同様に抜粋、整理した結果、初級の接続表現として

は37種類になった。これも接続関係を考慮して103種類に下位分類した。複文の調査のためには接続表現を指標にする必要があるため、初級で既習のもの以外についても初級で未習の接続表現としてリスト化した。未習の接続表現は『日本語能力試験出題基準』の2級、1級の中からと3、4級の中で、初級としては指導されない機能ではあるが、文を複合化する場合に使用されるものごとを抜粋、整理したものである。初級で未習の接続表現は、72種類を75種類に下位分類し、『茶筌』の形態素解析の機能を考慮して助動詞文の中で複文と判断されることが少ないもの4種を加えると、合計79種になった。文末表現と接続表現のリストは資料として巻末に添加する。

2.2. 調査方法

図2に調査手順を示す。調査対象は、奈良市で平成8年度から使用されている主要5教科6学年分の検定教科書で、合計40冊分である。生活科は理科・社会科とは別教科と考えた。

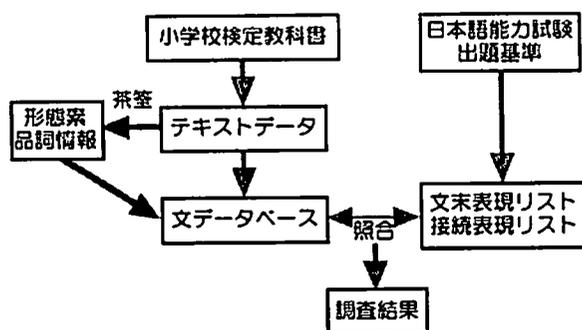


図2：調査手順

これらの教科書に掲載されている文のうち、文末に句点がある文をテキストデータ化し、さらに、形態素解析器『茶筌』で処理することによって得られた文の形態素情報と品詞情報を付加し、これを図3のように教科書データベースとした。

例) 出版社: keirin
 教科: nka
 学年: 3
 行番号: 3
 原文: 約束を守って活動しよう。
 原文の形態素: 約束 を 守って 活動 しよう。
 原文の読み: やくそく を まもって かつどう しよう。
 原形: 約束 を 守る 活動 する。
 品詞情報: サ変名詞 格助詞 動詞-子音動詞ラ行-タ系通用
 テ形 サ変名詞 動詞-サ変動詞-恩志形 句点

図3：文データベースの例

次に、『日本語能力試験出題基準』から基礎的な文末表現と接続表現を抜粋、整理し、文末表現と接続表現のリストを作成したが、このリストを教科書データベースとなった検定教科書中の実文に照合する。この照合により、基礎的な日本語文法で認識できる構文が実文中にどの程度あるか、さらにどのようなものを習得する必要があるかについて調査する。このような初級構文と初級外構文についての出現頻度の計測にあたっては、初級構文と初級外構文を次のように規定することにした。初級構文とは、初級文末表現で構成されている単文と、初級文末表現の文に初級接続表現が1回含まれている複文であ

るとする。したがって、初級外構文としては、初級文末表現以外の文末表現を持つ単文と文末表現に関係なく初級外の接続表現が使用されている複文となる。ただし、初級接続表現が複数使用されている複文については、初級構文学習時に取り立てて指導されないことが多いため、初級外と考える。

以上のような準備により、文末表現は、初級・初級外、教科別・学年別に、使用されている頻度とその割合を調査した。さらに、形態や意味機能により分けた8種のグループから使用傾向を調べた。また、接続表現を指標に、単文・複文の割合を調べ、さらに、文中に初級接続表現と初級外接続表現が含まれる状況を調べた。

3. 調査結果

3.1. 初級文末表現と初級外文末表現

初級の文末表現が全文中に占める割合は93.3%であった。初級の文末表現でないと判断されたものはそのほとんどが、基礎的な構文の応用と考えられるもので、「倒置文」「従属節を主節と入れ換えた倒置的な文（～は～からです。等）」「節に後続する文が省略された省略文（遠足に行ったら・・・等）」であった。全くの初級外文末表現は、「～まい。」「～だっけ。」「～たのな

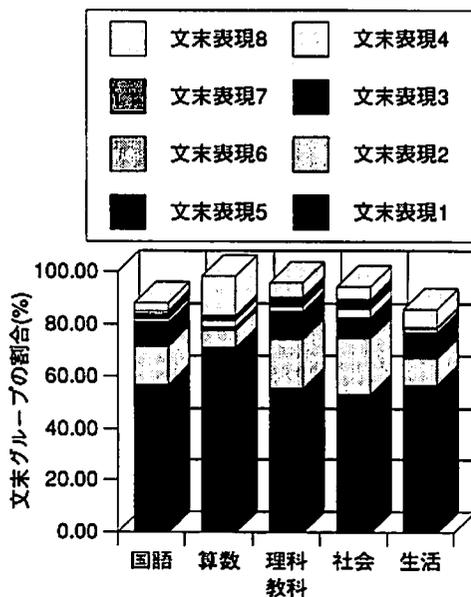


図4(a)：文末表現グループの占める割合(教科別)

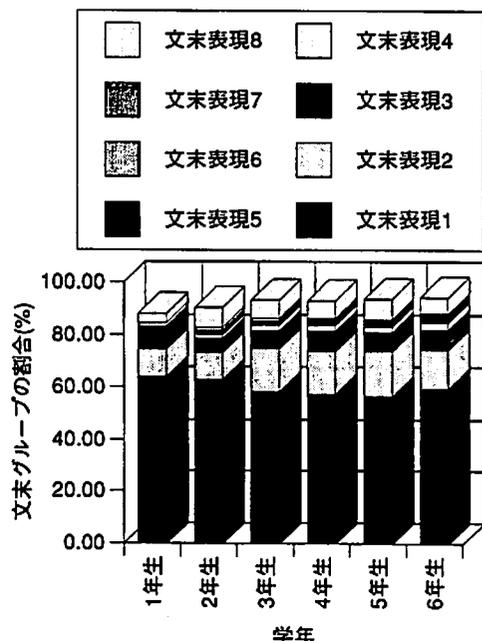


図4(b)：文末表現グループの占める割合(学年別)

んのって。」「～やしない。」「～たか！」などの15種類程度の表現文型で、使用頻度も使用数が全文中で10回程度と低く、倒置文や名詞1語相当文の方が、未習の表現文型より多い頻度で初級外文末表現の内容を占めていた。

初級文末表現を教科別でみると、使用される文末表現に偏りがあった。学年別では顕著な違いではないものの、若干ながら、低学年より高学年の方が初級文末表現の使用割合が高くなっていった。それは図4(a)(b)でも分る。

初級文末表現は、172種のうち、「～てあげる」「ほうがいい」「つもりだ」「はずだ」「はずがない」「形容詞述語文と思う」等の172種類のうち57種類の文末表現については、まったく使用されていなかった。

図4(a)でグループ別に使用される文末表現の内訳を見ると、算数では基本構造文型(文末表現1)が71.1%、表現文型(文末表現8)が14.9%となっており、使用頻度が他教科より高いが、複合化した動詞述語文(文末表現2)の使用頻度が低い。また、初級文末表現の占める割合が非常に高い。算数で文末表現8が多いのは、「～なさい」という表現の使用頻度だけが非常に高いためである。その他の表現文型はほとんど使用されてない。

生活については、表現文型の占める割合が多くなるだろうと予想された国語より文末表現8が多く、また、初級外の文末表現の使用が多いことが図4(a)に示されている。さらに、他教科ではあまり顕著な使用が見られない「なる」「する」の文末表現5の使用が多い。文末表現5は理科での使用が多いと予想されたが、3.4%とそれほど使用されていなかった。また、理科では助動詞文(文末表現3)の使用が多いことも予想外であった。

図4(b)で学年別にみると、文末表現1が徐々に減少しているが文末表現2は中学年以降は低学年より増えており、若干ながら増減を繰り返している。さらに、図4(b)によると、学年が上がるにつれて初級外の文末表現の使用頻度が減少していることがわかる。

3.2. 単文と複文

文中に述部が1つである単文と複数の述部を持つ複文の割合を比較した。比較結果を図5に示す。実文全体で総合的に見ると、単文と複文では複文の方が多く、全体の75%を占めている。これを教科別でみると、理科、社会では、複文が約85%を占め、国語、算数では約70%、生活では約60%であった。

学年毎に見ると学年が上がるにつれて複文の頻度が増えていき、単文の頻度は逆に減っている。

また、図6(b)を見ると、複文が学年毎に推移することと関連するかのよう

に、初級の知識で認識できる範囲が学年を追う毎に減少していき、初級外の構文が増加している。これは、文末表現は初級が約93%を占めることに変わりはないのであるから、初級外の複文構造の使用される頻度が高くなっていることを示している。

文末表現をグループ別に見ると、学年が上がるにつれて、徐々にではあるが基本的な構造文型(文末表現1)の頻度が減っていき、動詞が複合化した述部の文(文末表現2)の頻度が増加している。したがって、若干ながら複文を構成している複合化した動詞述語文が増加していることになる。

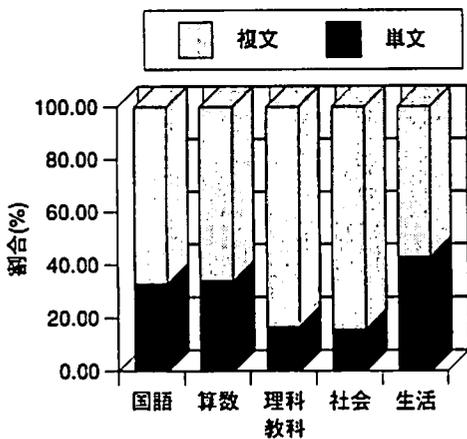


図5(a)：初級の単文・複文の割合(教科別)

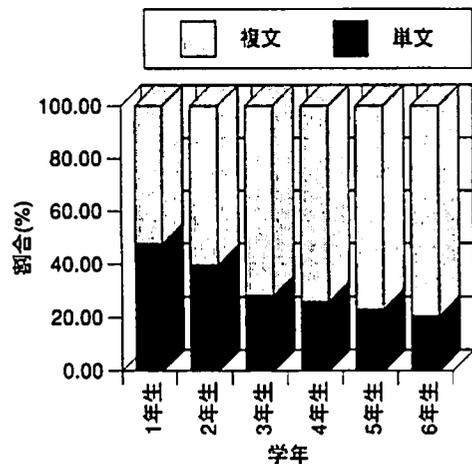


図5(b)：初級の単文・複文の割合(学年別)

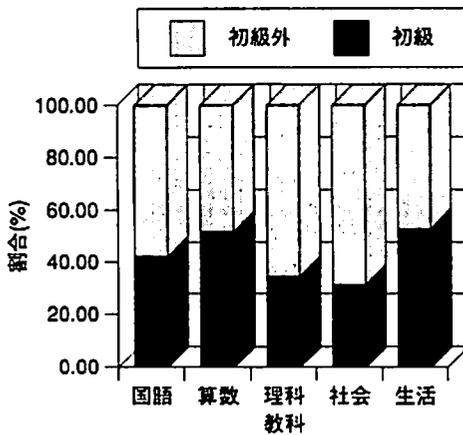


図6(a)：初級/初級外の文末表現(教科別)

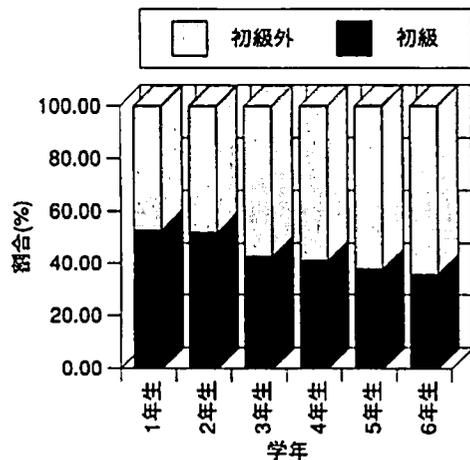


図6(b)：初級/初級外の文末表現(学年別)

3.3. 複文の構造

各教科と各学年における初級複文の占める割合をそれぞれ図7(a)および(b)に示す。

初級複文は、初級の接続表現が1回出現する複文(1/0)である。これは複文全体の20%程度の割合であったが、教科別にも、学年別にも、使用に偏りが見られなかった。初級の接続表現が複数回出現する複文(2/0)と初級の接続表現が複数回と初級外の接続表現が1回出現する複文(2/1)については、初級複文の発展的応用となる文である。これら3つの複文形態を全てあわせると、全複文中の63.4%を占めていた。

図7(a)で教科別の複文構造を見ると、算数と生活以外は、初級の接続表現が複数回使用される複文の占める割合の方が多かった。

図7(b)で学年別に見ると、1年生は、1/0は2/0、2/1を合わせたとほぼ同じであったが、3年生で初級接続表現を複数含む複文(2/0、2/1)の割合が急に増加し、3年次以後は若干ながら、増加していた。2/1は、学年が上がるに連れて徐々に増加している。

また、個々の接続表現の組み合わせパターンには特徴は見られなかったが、文末表現と同様に、接続表現の使用においても教科毎に偏りがあり、動詞のテ形、形式名詞コト、条件文のト、ヨウニなど、よく使用されている物は限定されていた。さらに、よく使用される接続表現でも、1文中に1度しか出ないものと何度でも出現するものがあった。

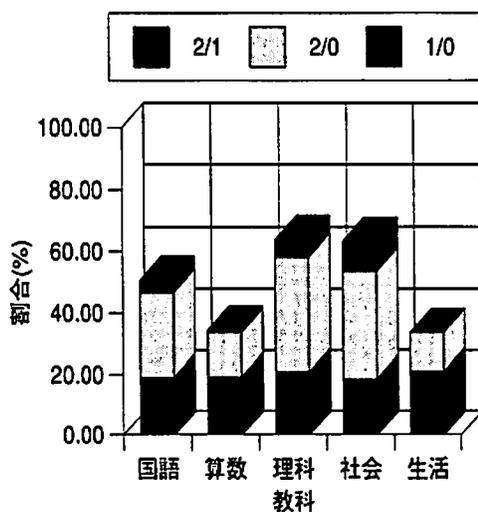


図7(a)：初級複文の占める割合(教科別)

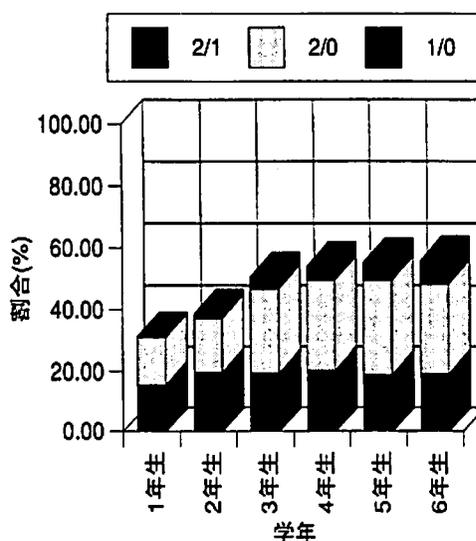


図7(b)：初級複文の占める割合(学年別)

4. 分析

全体で初級文末表現の割合と初級以外とされる文末表現の種類を見た結果、基本的に、構文上、既習のものでほぼ理解可能だと考えられる。ただし、基礎構文であっても倒置などの応用的な使用が多い。補助的な文法項目とその機能や、構文の崩し方についても、指導しておく必要がある。さらに、初級で学ぶ文末表現であっても、それから類推できる実用文型のモデルは、修飾語等のない骨格だけである。したがって、既存の知識で認識可能だとは言いがたい。既習の文法知識を使用して実際の文を読解したり表記したりするようになるには、文末表現を指標にして、実際の文から実用文型が類推できるようにする力を特別に養うといった、知識と実文とを照合させられるようにする訓練を行うことが有効だと言える。

一方、検定教科書で使用される文末表現には教科により偏りがあった。「～なさい」等ある教科にのみ使用されていて、他の教科では顕著に見られないという表現もあった。さらに、文末表現の学年別の割合を調べた結果から、全体的に高学年にいくほど名詞述語文や動詞述語文等の基本的な構文型の構文を多く使用するという傾向が顕著であることがわかった。教科の指導内容や、教科の内容が算数のように基礎から順に積上げ形式で学習内容が高度化していくものか、理科のように同じ題材を発達段階に即した表現で学習していくような拡大形式で複雑化していくものかにより、語彙指導にまず力を入れるべきかどうかを配慮できる。

このように、教科、学年により、文末表現から見た構文の使用に変化が見られることや、また、初級学習項目である文末表現の中には教科書内で使用されていない表現もあったことから考えて、教科別にシラバスを組むことは、学習用日本語指導のためには有効な手段であるといえる。ただし、文末表現については、学年別の使用の偏りは徐々に初級のものが増えているということから、文末表現において考慮する必要があるのは教科の違いだけでよいだろう。

初級、初級外で分けて見る一方、単文と複文について全体的に見ると、複文の方が多く使用されていた。複文においても、教科別、学年別に偏りがあった。このため、指導内容を考えるに当たり、接続表現の指導比重を教科別、学年別に配慮する必要がある。また、複数の節からなる複文の使用が多い。中でも初級項目として学習済の接続表現を複数回使用する複文の使用頻度が高いことが分かった。このことから考えると、初級として学習してきたことを応用する訓練を行う期間が必ず必要であることがわかる。

応用力を養う期間には、文末表現と同様に、接続表現にも着目して構文を把

握し、文を理解、表現するという訓練が必要だろう。文末表現、接続表現からは実用文型などのモデルが類推でき、文の構造がわかる。しかしながら、修飾語などで複雑化する実文に対応していくにはモデルを知っているという知識では不十分なためである。

また、検定教科書内の未習表現の学習も継続されなければならない。それ以外にも日常の話し言葉でも使用される未習表現は多いと推測できる。一般日本語教育で学ぶ中級以降の文末表現を習得していくことも忘れてはならないだろう。したがって、効果的な教科学習用の日本語指導、応用訓練と、話し言葉のための日本語指導を平行して別の視点から配慮した指導を考えていく必要があるといえる。

5. 考察と今後の課題

本調査では検定教科書で使用されている構文の概要を調査し、初級の学習項目と初級外の項目との関連から初級日本語教育のシラバスと検定教科書の構文との照合を行った。その結果、検定教科書の文構造の概要が、教科毎の使用文末表現の偏りや単文、複文の割合、接続表現の使用状況等を通して明らかになった。

教科学習に対応するための移行期の日本語教育にあたっては、各教科で使用に偏りがみられる項目を各教科の基本文型として指導することが望ましいのではないだろうか。高頻度で使用される文を類型化した物が基本文型であるとされ、多くの一般日本語教育において文の類型から基本文型が設定されている。同様に、検定教科書の日本語を目標に日本語教育を行う際も、各教科の教科書で頻繁に出現する文型が検定教科書の基本文型と考えられるからである。この基本文型をもとに、中級以降の外国人児童にとって有効なシラバスが、読解、作文教育を行い、自律学習へとつなげていくために、作成できると考えられる。

また、日本語教育を総合的な言語運用訓練と考えた場合、初期指導の次に、一般的な日本語教育と、検定教科書に対応する書き言葉の日本語学習とを分けて日本語教育をする期間を設ける必要性が指摘できる。書き言葉では使用されない表現でも、実生活では自己表現のために必要である表現も多いからである。

学習用の日本語教育と一般日本語教育とを明確にして提示するためには、さらに調査を進め、各教科毎の基本文型、基本的な複文構造、文章構造の抜きだしとその応用を考える必要がある。また、基本的な文法機能語や語彙、慣用語

句等を抽出し、類型化を計るべきである。このため、教科書の語彙的なものの調査によって複合辞などの文法機能語を抽出し、文末で述部を形成する文法項目、複文の指標となる接続表現、その他の文法項目を確実に検定教科書の中から抜粋できるよう調査方法を確立することが必要である。

今後は、この結果を踏まえて教科書データベースの構築試案を実行に移し、教科学習における日本語教育のために、基礎資料として公開を予定している。これは、編入時期や学年、日本語の習得状況や原学級の学習進度に合わせて、それぞれの外国人児童が持つ問題に対応するための支援体制の一環となると考える。

註

1. 本稿で使用の『茶釜』も正解率が約97%を達成している。また、品詞情報を添えたデータベースを利用すれば、語彙調査や語の共起関係の調査へも発展させる利点が考えられたこともある。
2. 東京外国語大学(1998)によると『日本語を学ぼう』1,2,3と『ひろこさんのほんご』1,2 があげられる。

引用文献

- 外国人子女の日本語指導に関する調査研究協力者会議(1998)『外国人子女の日本語指導に関する調査研究<最終報告書>』東京外国語大学
- 岩沢正子・高石久美子(1994)「『算数』の教科学習を助ける日本語テキスト試案」『日本語教育』83 日本語教育学会 pp.73~84
- 三島敦子(1996)「外国人児童への教科学習支援について」『東北大学文学部日本語学科論集』第6号 東北大学 pp.93~104
- 寺田裕子(1994)「義務教育過程における教科教育を目的とした日本語指導—中南米からの日系就労者子弟への社会科・数学指導の実践報告—」『日本語教育』83 日本語教育学会 pp.29~39
- 市川保子(1993)「中級レベル学習者の誤用とその分析—複文構造習得過程を中心に—」『日本語教育』81 日本語教育学会 pp.55~66
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- 国際交流基金・財団法人日本国際教育協会(1996)『日本語能力試験出題基準』凡人社
- 長尾真他(1998)『岩波講座言語の科学9 言語情報処理』岩波書店
- 松本裕治 他(1997)『日本語形態素解析システム『茶釜』version1.5 使用説明書』NAIST Technical Report NAIST-IS-TR97007, Jul.

初級文末表現表(No.: 文末表現番号, G: 文末表現グループ番号, 不:不使用)

No.	G	不	文末表現	No.	G	不	文末表現	No.	G	不	文末表現
0			未習の文末表現	58	6		くださる	116	4	×	ないと思う
1	1		イ形容詞文	59	6		てくださる	117	4		動詞と思う
2	1		ナ形容詞文	60	8		動詞基本形ところだ	118	4		動詞と(は)思わない
3	1		～です	61	8		動詞タ形ところだ	119	4		動詞性接尾辞と思う
4	1		名詞文	62	8		ているところだ	120	4	×	動詞性接尾辞と(は)思わない
5	1		イ形容詞です	63	2		てしまう	121	4		助動詞と思う
6	1		ナ形容詞です	64	2		動詞連用形+つづける	122	4	×	助動詞とは思わない
7	1		動詞性接尾辞です	65	7		お～する	123	3	×	つもりだ
8	3		動詞の推量形	66	8		ようとする	124	3		動詞つもりだ
9	1		動詞文	67	8		ようと(は)しない	125	3		判定詞つもりだ
10	1		存在文ある	68	2		動詞連用形+はじめる	126	3	×	イ形容詞つもりだ
11	1		存在文ない	69	4		と言う	127	3	×	ナ形容詞つもりだ
12	1		存在文いる	70	4		と(は)言わない	128	3	×	ないつもりだ
13	8		たい	71	8		をください	129	3	×	動詞性接尾辞つもりだ
14	2		動詞連用形+だす	72	8		てください	130	3		助動詞つもりだ
15	8	×	形容詞語幹+がる	73	2		使役受け身	131	7	×	お～いたします
16	6		やる	74	7		お～になる	132	8		ないてください
17	3		のだ	75	7	×	お～に(は)ならない	133	4		ようと思う
18	1		である	76	8		動詞基本形ことがある	134	4	×	ようと(は)思わない
19	3		のだろう	77	8		形容詞ことがある	135	8		てもいい
20	3		らしい	78	8		動詞基本形ことになる	136	8		てもかまわない
21	8		～なさい	79	8		動詞基本形ことには(は)ならない	137	8		てはいけない
22	8		～がする	80	8		形容詞ことになる	138	8		なくてもいい
23	5		くなる	81	8		形容詞ことには(は)ならない	139	8	×	なくてもかまわない
24	5	×	く(は)ならない	82	8		動詞基本形ことにする	140	8		かもしれない
25	5	×	ナ形容詞になる	83	8		動詞基本形ことには(は)ならない	141	3	×	はずだ
26	5	×	ナ形容詞に(は)ならない	84	8	×	形容詞ことにする	142	3		動詞はずだ
27	5		名詞になる	85	8	×	形容詞ことには(は)しない	143	3		判定詞はずだ
28	5		名詞に(は)ならない	86	4	×	ように言う	144	3	×	イ形容詞はずだ
29	5		くする	87	4	×	ように(は)言わない	145	3	×	ナ形容詞はずだ
30	5		く(は)しない	88	4	×	形容詞ように言う	146	3		ないはずだ
31	5	×	ナ形容詞にする	89	4	×	形容詞ように(は)言わない	147	3		動詞性接尾辞はずだ
32	5	×	ナ形容詞に(は)しない	90	5		動詞基本形ようにする	148	8	×	はずがない
33	5		名詞にする	91	5	×	動詞基本形ように(は)しない	149	8		動詞はずがない
34	5		名詞に(は)しない	92	5	×	形容詞ようにする	150	8	×	動詞性接尾辞はずがない
35	2	×	動詞連用形+おわる	93	5		形容詞ように(は)しない	151	8	×	ないはずがない
36	6		てやる	94	5		動詞基本形ようになる	152	3		動詞ようだ
37	6		あげる	95	5		動詞基本形ように(は)ならない	153	3		動詞性接尾辞ようだ
38	6	×	てあげる	96	5	×	形容詞ようになる	154	3		判定詞ようだ
39	6	×	ていてあげる	97	5	×	形容詞ように(は)ならない	155	3	×	イ形容詞ようだ
40	8		形容詞語幹+すぎる	98	7		ございます	156	3	×	ナ形容詞ようだ
41	2		である	99	6	×	さしあげる	157	3		ないようだ
42	2		ている	100	8	×	動詞ほうがいい	158	3		そうだ
43	8		ほしい	101	8	×	形容詞ほうがいい	159	3		動詞そうだ
44	8		てほしい	102	8		させてください	160	3		ないそうだ
45	2		ていく	103	8		ことができる	161	3		判定詞そうだ
46	2		てくる	104	7	×	お～ください	162	3	×	イ形容詞そうだ
47	3		だろう	105	7	×	ではございません	163	3	×	ナ形容詞そうだ
48	2		てみる	106	8		動詞タ形ことがある	164	8		なければならない
49	2		ておく	107	6	×	てさしあげる	165	8	×	なくてはいいけない
50	8		動詞連用形+やすい	108	4		と思う	166	8	×	なくてもかまわない
51	8		動詞連用形+にくい	109	4	×	と(は)思わない	167	4	×	だろうと思う
52	6		もらう	110	4		判定詞と思う	168	4	×	だろうと(は)思わない
53	6		くれる	111	4		判定詞と(は)思わない	169	8		動詞基本形といい
54	6		てくれる	112	4	×	イ形容詞と思う	170	8		ばいい
55	6		てもらう	113	4	×	イ形容詞と(は)思わない	171	8		たらしい
56	6		いただく	114	4		ナ形容詞と思う	172	8	×	ならいい
57	6		ていただく	115	4	×	ナ形容詞と(は)思わない				

初級接続表現表

No.1	初級で既習の接続表現	62	判定詞 ということ～	18	動詞 せいで
1	～て	63	～というもの	19	動詞 だけあって
2	～ていて	64	動詞 というもの～	20	動詞 だけに
3	～て+補助動詞	65	動詞性接尾辞 というもの～	21	～たとたん
4	～について等複合辞(除外用)	66	イ形容詞 というもの～	22	～るたびに
5	～てから	67	ナ形容詞 というもの～	23	動詞 ついでに詞
6	の+形式名詞	68	判定詞 というもの～	24	～つつ
7	動詞+の+形式名詞	69	～というところ	25	～て(以来:いらい)
8	動詞性接尾辞+の(形式名詞)	70	動詞 というところ～	26	～たところ(で:に:が)
9	イ形容詞+の+形式名詞	71	動詞性接尾辞 というところ～	27	～とすれば
10	ナ形容詞+の+形式名詞	72	イ形容詞 というところ～	28	～としたら
11	判定詞+の+形式名詞	73	ナ形容詞 というところ～	29	～ないことには
12	こと+形式名詞	74	判定詞 というところ～	30	～にもかかわらず
13	動詞+こと+形式名詞	75	～とき～	31	～にしたがって
14	動詞性接尾辞+こと+形式名詞	76	～るまえ～	32	～につれて
15	イ形容詞+こと+形式名詞	77	～たあと～	33	～のみならず
16	ナ形容詞+こと+形式名詞	78	ても	34	～たばかりに
17	判定詞+こと+形式名詞	79	ていても	35	動詞(反面:半面)
18	もの+形式名詞	80	のに	36	～たものだから
19	動詞+もの+形式名詞	81	～ため～	37	～るにも
20	動詞性接尾辞+もの+形式名詞	82	～ので～	38	～たが最後
21	イ形容詞+もの+形式名詞	83	～と(条件)～	39	～がたら
22	ナ形容詞+もの+形式名詞	84	～ば～	40	～るが(早い:はやい)か
23	判定詞+もの+形式名詞	85	～たら～	41	～ることなしに
24	ところ+形式名詞	86	なら	42	動詞 そばから
25	動詞+ところ+形式名詞	87	たまま	43	～たところで
26	動詞性接尾辞+ところ+形式名詞	88	～ながら～	44	～てからというもの
27	イ形容詞+ところ+形式名詞	89	～ように～	45	命令形とばかりに
28	ナ形容詞+ところ+形式名詞	90	～て、～	46	～るともなく
29	判定詞+ところ+形式名詞	91	～て～て、～	47	～るともなしに
30	～か～	92	～ていて、～	48	～ないまでも
31	動詞 か～	93	なくて、	49	～るなり
32	動詞性接尾辞 か～	94	ナ形容詞で、	50	～たなり
33	イ形容詞 か～	95	判定詞で、	51	～るに(足る:たる)
34	ナ形容詞 か～	96	補助動詞で、	52	～るべきだ
35	判定詞 か～	97	くて	53	～るまでもなく
36	形式名詞か～	98	～し、～	54	動詞 ものを
37	～かどうか	99	～たり～	55	動詞 おり
38	動詞 かどうか	100	ないで	56	動詞 さい
39	動詞性接尾辞 かどうか	101	ずに	57	～るやいなや
40	イ形容詞 かどうか	102	なくて	58	～る(いぜん:以前)
41	ナ形容詞 かどうか	103	～が、～	59	～た(のち:後)
42	判定詞 かどうか			60	動詞 あいだ
43	連体修飾			61	動詞 まで
44	～と(引用)～	No.1	初級で未習の接続表現	62	～た(けっか:結果)
45	～という～	1	～たあげく	63	動詞 って～
46	動詞 という～	2	動詞 あまり	64	～けれども～
47	動詞性接尾辞 という～	3	動詞(いじょう:以上)	65	動詞 のに
48	イ形容詞 という～	4	～る(いっほう:一方)	66	動詞 わりに
49	ナ形容詞 という～	5	動詞(うえ:上)	67	動詞 くせ
50	判定詞 という～	6	～るうち	68	動詞 からは
51	～というの	7	～ないうち	69	動詞 より
52	動詞 というの～	8	動詞 おかげで	70	～るところか
53	動詞性接尾辞 というの～	9	～る(かぎり:限り)	71	動詞 との
54	イ形容詞 というの～	10	～ない(かぎり:限り)	72	動詞 ころ
55	ナ形容詞 というの～	11	動詞 からは	73	～るゆえに
56	判定詞 というの～	12	動詞 かわりに	74	動詞 基本連体形、～
57	～ということ	13	～ることなく	75	～わけて
58	動詞 ということ～	14	～たことに	76	～みたいで
59	動詞性接尾辞 ということ～	15	動詞(際:さい)	77	～べきで
60	イ形容詞 ということ～	16	動詞(最中:さいちゅう)	78	～そうで
61	ナ形容詞 ということ～	17	動詞 としても	79	～ないものだから